

「二人の神父」

2014年06月21日

「東京新聞」の19日（木）の夕刊に、佐々木神父のことが一面を費やして掲載されていた。「ブラジルでハンセン病患者支援 海を渡った日系神父 永住を誓う 彼らと幸せ分かち合う 祈りよ力に」という見出しである。

神父が帰国された時、「なか伝道所」で講演会が持たれた。それこそ底辺に立って、主イエスの福音に従うひたむきで、謙虚な姿勢に大きな感銘を受けた。また神父が創設した「ウマニタス（人類愛）慈善協会」で作っている健康食品のプロポリスを市販より安く、横浜港南台教会で販売している。ご購入ください。

新聞に掲載された神父の生い立ちと働きについて紹介したい。カトリック教徒の家に生まれたが、皇国少年であった。15歳で軍に志願した。そこで「貴様は天皇陛下と神様とどちらが大事なんだ!」とどなられ、黙って罵声を浴びるしかなかった。戦後、神に救われ、生きて戻れた喜びは大きく、人々と幸せを分かち合おうと神父の道を志した。上智大学大学院で神学を学び、瓦礫と化した横浜で働いた。ブラジル行きを勧められ、迷うことなく「必要とされるならば」と渡った。日系人は情報に乏しく、敗戦を認めない「勝ち組」が「負け組」を殺す事件もあった。

日系移民の住んでいる所を回ってミサを続けていた時、苦しんでいるハンセン病患者と出会う。特効薬が開発されているにもかかわらず、差別を恐れ、山や洞窟に隠れて悲惨な生活をしていた。彼らを探し出し、治療活動を始めた。神父に助け出されたハンセン病患者は二千人を超え、彼らから「神父は私の神様だ」と感謝されている。アルコールや麻薬依存症の人々の回復にも尽力されている。更に、土地なし農民の土地取得活動にも関わり、命の危険に会っている。84歳になったが、果樹に囲まれた施設の一角を住まいとし「日本に戻るつもりはない」とブラジルに骨を埋める覚悟で「幸せを分かち合う」生活を続けている。

神父は素晴らしい男性で、支援してくれる女性から何度も「全てをあげるから神父を辞めて」と懇願されたそうである。49.999%は結婚したかった。しかし、50.001%は神父でいたかった。迷いの末、献身の道を選び取ったと言う。小井沼宣教師にブラジルを案内された人は、必ずと言っていいほど神父を訪ねている。私は、残念ながら、お訪ねできなかった。

しかし、小井沼宣教師を通して堀江節郎神父と出会う幸いを得た。ブラジルに行った時、アマゾン河中流のマナウスで、司牧している神父の信仰基礎共同体のミサに与り、色々な所を案内していただいた。堀江神父に対する信者の信頼は、どこに行っても熱烈であった。車椅子に乗っているハンセン病患者が多くいる町に行き、町に出られない患者の施設を訪ねた。神父は患者と抱き（ハグ）合っ、挨拶を交わし、感動的なミサを受けた。堀江神父は人に知られることなく、埋もれた司牧を貫かれている。現在も極めて不便な所で、宣教活動をしている。聖フランシスコのように、主イエスの歩まれた道を貧しい人々と肩を並べて生きている。嬉しそうに「主イエスの風を感じています」と言っていた言葉を思い出す。

佐々木神父、堀江神父はブラジルで主イエスの福音を命を賭して現し続けている。カトリック教会の底力に敬服する。